

目次

ページ

都市計画研究会シンポジウム	・ LRTとまちづくり	1
特別講演会	・ 石丸先生功績賞受賞記念講演会	4
第1回学術講演会・まちづくりフォーラム2007	・ 1部:都市計画と教育	5
	・ 2部:参加のまちづくり10年	7
中国・四国リレーシンポジウム 公共空間とまちづくり	・ 第1回「水辺の景観・活用・治水」(松江市)	10
都市計画サロン	・ 脇田先生 さよなら講演!	12
会員紹介	・ 柏谷増男氏、松田智仁氏	13
ホットコーナー	・ 中国・四国地方にもICカード時代が到来か!	15
今後の活動計画		17
編集後記		18

都市計画研究会シンポジウム

LRTとまちづくり

平成18年度の中国四国支部の都市計画研究会のテーマ「LRTとまちづくり」シリーズの集大成である4回目の研究会が、以下に示す内容のシンポジウムとして開催されました。会場である広島市まちづくり市民交流プラザには年度末の2月にもかかわらず、「LRTとまちづくり」への関心が高いこともあって、会場は満席となる約60名強の方々が集まりました。

【シンポジウムの構成】

日時:平成19年2月3日(土)13:30~16:30

場所:広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室C

基調講演「トラムを中心とした都市交通戦略の最前線」

講師:松中 亮治(岡山大学大学院 助教授)

パネルディスカッション「LRTとまちづくり」

コーディネーター

杉恵 頼寧(広島大学大学院 教授)

パネリスト

阿部 宏史(広島大学大学院 教授)

高井 広行(近畿大学工学部 教授)

佐藤 俊雄(中国地方総合研究センター地域計画研究部長)

山根 政則(広島LRT研究会代表)

コメンテーター

松中 亮治(岡山大学大学院 助教授)

(敬称略 順不同)

1. 基調講演「トラムを中心とした都市交通戦略の最前線」

松中先生には、フランスのLRT整備(トラム整備)が進んでいるストラスブール、ミュールズ、ボルドーと2006年4月末に開業した富山ライトレールを事例に、豊富な現地での写真を用い以下に示す内容の基調講演を頂きました。

フランスでトラム整備が進んだ理由は、日本と比較して制度の違いが大きく、財源である交通税(Versement de

Transport)と合意形成の事前協議制度(コンサルタシオン、Concertation)にある。また、ナント(1985)、グルノーブル(1987)、ストラスブール(1994)等の先行都市の成功事例や推進に関係した人的資源も見逃せない。フランスの交通税は地方政府の目的税であり、建設費のみならず運営費の補助にも使用できる。一定以上の従業員を有する事業所の雇用主に対して従業員の給料額に応じて課税される仕組みとなっており、都市圏人口や公共交通機関整備状況のレベルに応じて課税され、最高税率は1.8%である。

事前協議(コンサルタシオン)での合意形成のプロセスは、計画立案 事前協議(コンサルタシオン) 最終案策定 第三者の公的審査 最終決定(議会承認、公益宣言)となっており、かなめとなる事前協議(コンサルタシオン)では、各種メディアでの情報の開示、アンケート、インタビューによる住民からの意見聴取、説明会、討論会による意見交換が行われる。

ストラスブール、ミュールズ、ボルドーのLRT(トラム)成功事例に共通した一體的に進められている都市交通に関する施策は次のように整理できる。



松中亮治氏

<一体的に導入されている交通施策>

- ・バリアフリー(低床、スロープ、沿線建物入口改修)
- ・利便性(優先信号、運賃体系、シームレスな乗り換え)
- ・自動車対応(P & R、駐車場施策、流入規制)

<都市整備との一体化>

- ・都心開発(ショッピングセンター、都市施設整備)
 - ・商店街の協力(沿線商店のセレクション)
 - ・景観・芸術性(架線レス、ファサード改装、モニュメント)
- 人的資源にみる特徴では、LRT(トラム)の担当者が、グルノーブル ストラスブール ミュールズと移籍し、蓄積したノウハウの活用を行っている。LRT(トラム)整備は市長選挙の公約であり、合意形成は戦闘である。新たに日本で整備された公設・民営方式の富山ライトレールでは、開業前の平日利用者約2,500人が開業後には約4,900人と2倍近い伸びを示している。LRTを中心としたまちづくりを進めるためには『百聞は一見にしかず』富山ライトレールがまちにもたらした影響を『的確』に伝えることであり、第2、第3の成功につながる。

2. パネルディスカッション「LRTとまちづくり」

パネルディスカッションでは、中国地方各地で検討中の「LRTとまちづくり」の講演頂きました。

【阿部 宏史先生】

岡山市の路面電車延伸構想

1994年3月に岡山商工会議所・都市委員会が「人と緑の都心1km スクエア構想」を提言、これを受け岡山市が「まちづくり交通計画調査委員会」を設置し岡山駅から市役所を經由して岡大付属病院までの1.6kmの延伸計画が発表された。この計画は市役所筋の2車線を削減することであり、2001年2月に交通社会実験が実施され大きな交通渋滞を起こさないことが確認された。その後、市民意識調査も行われたが事業所・店舗の反対も多く現在に至っている。

JR吉備線のLRT化構想をめぐる動き

2003年2月JR西日本が富山港線と吉備線のLRT化構想を発表し、6月に岡山市が吉備線LRT化構想の計画素案策定を表明。JR吉備線沿線町内会が吉備線LRT化の署名活動開始2007年1月に17,220人分の署名を県、市、JRへ提出。2006年8月に国土交通省がLRTを全国の約10都市で整備することを発表したことを受け、11月に商工会議所が岡山市に吉備線LRT化の早期実現を要望し現在に至っている。



阿部宏史氏(左)と山根政則氏

【高井 広行先生】

「東広島市へのLRT導入の検討」はJR9駅、2つ高速道路インターチェンジ、新幹線駅をもつ東広島市には重要な交通施策。

西条駅～広島大学への導入試算

- ・事業費 66～100億円・利用者数 3,500人～4,400人/日
- ・運営収支 約1億円の赤字/年間
- 東広島のまちづくりにおけるLRTへの期待は大きい
- ・周辺地区開発の可能性を増大
- ・東広島市のシンボル及びイメージ向上
- ・高齢者、身障者等交通弱者の足の確保
- ・交通事故低減効果
- ・総合交通体系の充実
- ・環境にやさしい交通手段
- ・新幹線の利用促進
- ・夜間の犯罪低減効果
- ・街の賑わい創出へ寄与 等多くの効果を期待
- LRT導入に向けた今後の課題
- ・中心拠点及び沿線における開発誘導
- ・トランジットモール化による都心活性化
- ・ランニングコストの削減
- ・官民一体となった取組み
- ・建設費に対する補助制度の拡充

【佐藤 俊雄氏】

広島市におけるLRTとまちづくりをテーマに講演を頂きました。

これからの都市計画には創造的環境が重要である。創造的環境には、知的な人材が集まりたくなる環境、集まりやすい条件が必要であり、前者が「都心」のテーマ、後者が「アクセス交通」のテーマと考える。都心では、自由な歩行空間や公共空間の魅力の創出・向上や、アートな環境をかもし出すことが重要と思われる。LRTは地方都市における都心へのアクセス交通としての役割への期待が大きいだが、都市の規模によって活用のテーマは異なってくるのではなかろうか。

- ・例えば富山ライトレールではコンパクトシティ構想の実現手段として活用しようとしている。
- ・多くの中規模都市ではトランジットモールとして活用しようとしている。



高井広行氏(左)と佐藤俊雄氏

3. 討議および質疑

基調講演、パネルディスカッション通じ活発な討議や質疑が杉恵先生のコーディネートのもとに行われました。その中の貴重な論旨を以下に示します。

LRT整備が各事例で進まない状況を見ると、市民の賛成の温度差の克服や事業者の反対の留め方など、富山のライトレールに負けており、富山に学ぶべき。日本の公共交通は企業活動の採算であるが、フランス、韓国の例にあるように公共の介入・補助が成立の条件である。(コメンテーター松中先生)

LRT導入をWITH、WITHOUTの採算性の評価だけでなく、滞在時間の視点からの中心市街地活性化への寄与など社会的な評価を加えて前に進めるべきである。(高井先生、佐藤氏、山根氏)

ICカードや信用乗車など公共交通としてのスピードアップも必要な施策である。(杉恵先生、山根氏)

モータリゼーションから環境にシフトをしないとイケない時期。LRT導入後は皆が使い続け、大事にすることが重要なテーマ。(広島大学藤原先生)

LRTはユニバーサルデザインの公共交通手段であり、身障者の方々も加わったシンポジウムを年1回は開催して欲しい。(会場より)

(文責：安永 洋一郎)

地方中枢都市である広島ではこのような視点に加えて、広域の玄関口(広島駅)と都心の速達性の確保が重要。
・札幌・仙台・福岡のJR中央駅・都心部交差点アクセシビリティが6~7分であるのに対し広島の現状は16分。
・計画のある駅前大橋ルート、平和大通り東ルートの整備により都心へのアクセシビリティは大幅に改善できる。

【山根 政則氏】

講演の冒頭に山根氏自身が東京からリタイア後、広島に住んだ時、大都市の地下鉄に比較しフラット移動できる路面電車に大いに感激した旨述べられ、これまでの広島LRT研究会の活動内容の講演を頂きました。

1999年7月に広島市長に市内軌道改善提案として、西広島~広島駅はアストラムラインの延伸よりも平和大通りにはLRTネットワーク建設が望ましいことを提案。この中の西観音町~小網町~江波線接続は広島市の計画に組み込まれた。

交通結節機能を高める、アストラムライン・広電 地下袋町新駅案も提案している。

広島駅東の新市民球場へのアクセスも広島駅からの徒歩では山根氏自身の足で12分もかかる。暑い夏場を考え是非とも先手を打って広島駅からの単線ループ方式(球場バス停とも接続)の駅前大橋ルートからの延伸案を計画すべきと提案している。

パリにも南マルショーにLRTが復活した。2005年3月の中国運輸局、広島市、各種団体の構成によるLRT検討委員会の新4ルート案(平和大通りの東西、駅前大橋、段原宇品東)を早く進めるべきである。



LRT議論に真剣なまなざしのシンポジウム当日

特別講演会

石丸先生功績賞受賞記念講演会

テーマ：広島から始めて都市・地域・環境へ - 拘りと躓きと執念と -

講師：石丸紀興氏(広島国際大学教授)

日時：2007年3月7日(水曜日)、18:00～20:00

場所：コンフォートホテル広島(会議室)

参加者数：15名

平成18年度日本都市計画学会功績賞を受賞された広島国際大学の石丸紀興教授の特別講演会は中国四国支部の主催で、2007年3月7日に



広島市内のホテルで開催されました。功績賞の受賞理由は下記に示すとおりですが、その内容は都市計画(まちづくり)の計画方法論、都市調査方法論、原論(都市形成・計画史)と多岐に渡っています。

平成18年度日本都市計画学会功績賞受賞理由 まちづくり計画方法論の早期展開と地域都市問題及び都市形成史研究に併せた問題提起

1. 昭和46年頃から開始した住民参加方法を組み込んだまちづくり計画を実践し、都市計画の新たな展開を図ろうとした。当時、新都市計画法の制定でも住民参加型の計画が推進される方向性は明示されたが、自治体によっては住民参加に道を開くことには根強い抵抗があったが、広島市の合併前の市内周辺部のいくつかの地区を対象としたまちづくり計画(計画策定の委託業務)において、住民参加方式を提案し、試行しながら実践した。まちづくり計画を中心的な役割を担って進めた。当時まだワークショップ方式といった概念も普遍化していない時期であったが、その地区の役員等を中心にした「委員会方式」と一般住民の自由な参加を可能にした『考える会方式』という対照的な方法を設定し、調査から計画枠組みの確定、計画原案作成、計画案の検討、最終案の確定といった過程を辿って計画策定した。当初、必ずしも同調しなかった行政当局も、時代の変遷とともに一定の理解を示し、部分的に都市政策として認知する方向性を示した。

2. 昭和40～50年代当時、瀬戸内海沿岸各地で公有水面埋立が大規模に進められつつあり、更に大規模な埋立構想が進行しつつあったときに、本来土地利用とは面的な概念であるが、海岸線沿いに線状あるいは帯状に土地利用(広義の土地利用)を見ることによって海岸線の実態把握が可能であることを示し、現実の瀬戸内海沿岸(四国側、近畿、山陽側、九州側)の海岸線において実態調査し、地図等の情報収集も行い、その結果を一定の区間毎に各種指標毎に数値化することを果たした。結果的に自然海岸の著しい減少、人口海岸の増大、海水浴場海岸の消滅・後退といった傾向をデータとして明らかにし、埋立計画の進行によってはその傾向が更に著しく進行することを示した。さらに、海岸線の意味については、埋立用地としての価値でなく、生態学的な重要な役割、景観やレクリエーションとしての重要な役割、水質・空気等の浄化・悪化防止といった重要な機能、等を有することを海外における海岸政策の事例も参考に指摘し、一定の自然海岸の存在、保存が不可欠であることを提唱し、無造作な埋立を警告した。その後、海水汚染、大気汚染、工業化による公害の発生、人的な被害や汚染漁問題もあって、調査結果は一定の問題提起となり、環境庁の「緑の国勢調査」でも同様な海岸線分類のもとで調査がなされ、「瀬戸内海環境保全臨時措置法」制定施行への動きを加速した。

3. 昭和50年頃から、広島市の戦災復興計画関係者からの聞き取り調査を開始し、確認されていなかった計画思想や新たな事実・資料を明らかにした。聞き取り関係者は広島だけでなく中国地方の戦災都市や長崎、大阪、名古屋、さらに中央政府関係者にまで及び、当時健在であった復興計画関係者100名を超え、証言集として自費出版

し、今では極めて貴重な聞き取りテープ資料となった。そういった中から、広島市史である「広島新史」において、「都市文化編」として戦後復興過程を計画構想、計画思想、事業遂行といった側面から記述した。同時に文化人類学的手法で戦後の市民生活の変遷を辿ることとなった。この成果は、広島では被爆40年を記念した図説「広島被爆40年史都市の復興」として結実し、さらに被爆50年史編集へと展開することとなった。同時に、特別法「広島平和記念都市建設法」の制定問題や、広島駅前のヤミ市の歴史的考現学的考察へと繋がり、更には広島の被爆建物の研究へと展開した。これは被爆50年を記念した被爆建物記録保存研究・業務へと連動していった。一連の研究活動を通じて、市民の被爆建物への関心を強め、被爆建物を保存することの重要性の認識、「被爆建物等継承方策対策検討委員会」「被爆建物等保存要綱」といった保存政策、現在においても取り壊しを免れて保存・利用されるいくつかの被爆建物の存在に繋がった。復興計画史研究は、広島だけでなく沖縄、東京、戦災復興院囑託による復興計画に関する研究論文として発表した。広島復興研究の成果はJICAプログラムやUNITARプログラムで来日した留学生や関係者への講義、講演会として展開している。

石丸先生には「広島から始めて都市・地域・環境へ - 拘りと躓きと執念と」と題して、上記の受賞理由に示される内容に関わるエピソードを中心に講演していただきました。若き助手時代における広島市土地利用現況調査や総合計画に携わっていたときの先生の市職員以上の働きぶり、当時まだ定着されていなかった住民参加方式都市計画手法の先駆的な取り組みとそれが故に生じた行政組織との軋轢、企業本位の瀬戸内海の開発に伴う環境破壊問題に対する警告と海岸線利用への新しい価値観の必要性の訴え、日銀保存・レストハウス・袋町小学校・紙屋町横断歩道廃止などの問題に対する先生の考え方や行政との摩擦の紹介は印象深かったです。講演を通じて分かったことですが、長年の研究・教育・社会貢献活動の中で、先生には多くの「躓き」がありましたが、持ち前の「執念」と「拘り」をもって、中国・四国・九州地方、とりわけ広島都市圏の都市計画に関わるいろいろな問題に果敢にチャレンジしてこられています。先生の現実問題への真剣な取り組み姿勢、時代を予見する能力、そして、何といっても、信念を貫くために、どんな圧力・権力にも屈しない志の高さとそのための努力を惜しまないことに対して非常に感銘を受けた。そして、同時多発テロにおける解釈や憲法改正問題(憲法95条)など幅広い社会問題に対しても高い関心を示し、先生の活動領域は留まるところを知らない。先生の今後の益々のご活躍をお祈りいたします。(文責：広島大学・准教授 張 峻屹)



第1回学術講演会

日本都市計画学会中四国支部・ひろしままちづくりフォーラム2007実行委員会 共催事業

シンポジウム「これからのまちづくりの担い手とは」

日時：平成19年2月17日(土)13:00~18:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ

参加者：140名

プログラム：

第1部 都市計画と教育

基調講演 子ども・市民と対話できるまちづくりの担い手

延藤 安弘氏(NPO 法人まちの縁側育み隊 代表理事 愛知産業大学大学院教授)

話題提供 浦安市におけるまちづくりの教科書づくり 横堀 肇氏(広島大学大学院教授)

第2部 参加のまちづくり10年

事例発表及び講評

第1部 都市計画と教育

【基調講演 子ども・市民と対話できるまちづくりの担い手 延藤 安弘氏】



先生は、住民主体のまちづくり、まち育てというなかなか難しい厄介な内容を、燈の向こうに幻を見ながら進めることに意味を感じておられ、今回の講演も、幻燈を使って3つのプログラムを講師談話しながらの語り口で、御披露いただいた。幻燈プログラムの概要は、以下のとおりである。

1 絵本『トンネル』

イギリスとフランスを結ぶユーロトンネルが出来たとき、イギリスの作家ブライアン・ワイルドスミスが作ったトンネルという絵本がある。ロンドンに住む主人公のモグラとフランスに住む友人のモグラが、お互いに海底にトンネルを掘り進み、夢を叶えようとするが、そこには固い基準を押しつける技術者テクノラットと杓子定規の役人ビューラット、励ましや助言をくれる様々な生き物、そして行く手を阻むモンスター集団が登場し、住民参加のまちづくりのモットーである「困ったら自分の得意技を發揮する」によって苦難を乗り越え、「やはり住民参加のまちづくりは夢

が叶う」というわくわくまちづくり絵本である。状況は困難に満ちている地域であるが、遊び心を持って企て、冒険する心を持って地域は内側から代わっていくのではないか。そうした発想力のトレーニングが大切であり、あわせて、現代の日本の社会にはびこっているテクノラットやビューラットを乗り越えて、デモクラットという対話を楽しむまちづくり人になろう。まち育てを楽しむ存在になろう。そんな呼びかけがこの絵本の中からはなされている。今日の主題に対するコンセプトと大切なマインドがこのトンネルという絵本の中に集約されている。

2 子ども・住民参加のまちそだて

高知県赤岡町は、太平洋に面し、江戸時代に宿場町として栄えた美しいまちである。10年前に初めて訪ねた時は、人口は減少し、商店街も経済的に衰退の一途をたどっている状況であったが、「もうあかん」よりも「まだまだいける」の創造力にかけてみようということになった。「水切り瓦」がこの地域特有のものだと地域住民が気づいたことをきっかけに、まちの宝もの探しが始まり、「まちかど学校」や23枚の歌舞伎絵などの宝ものを発見した。それらを活かすとともに、「冬の夏祭り」や「絵金蔵」などさらなる新しい宝ものをみんなで作り上げ、子どもたちを中心に楽しいまちの「探検・発見・ほっとけん」をしながら、まちをこんな風に育もうという意識が育っていった。子どもの参画の視点と柔らかい活動の広がりの中から、分け隔てのないゆるやかな、「おでんのようなコミュニティ」を育もうと、住民たちのまちに対する関心と気づきが生まれた。まちづくり意識の教育的効果がここにある。

3 住環境教育の「かくされたカリキュラム」

事例研究の場は京都市洛南ニュータウンに移り、コーポラティブ住宅ユーコート住民48所帯の20年の軌跡をたどる。その小さな領域のなかに、まちづくりという大きな広がり縮図がある。

3300㎡の敷地の中に、中庭を囲むように作られたU字型のレイアウト。ゆったりとした中庭空間が人間関係を育む。ユーコートは1985年11月に誕生し、当時は、砂漠の中の緑であったが、今ではちょっぴりワイルドな森のような環境となり、緑に覆われた生き物のように変化した。ここに環境共生型都市づくりの一端が見え、様々な生活エピソードが繰り広げられていた。水平方向に人と人との関係を育むコミュニティが「続きバルコニー」を通して形成され、縦の方向に緑によってエコロジーが育まれていった。これからの創造的まちづくりにおいては、地域やテーマが変わっても、コミュニティとエコロジーが交差する状況づくりが大事だと言うことがここに語られている。

大人は、子どもたちを禁止の世界に追いやるのではなく、子ども自らが命ある自然を育む担い手となる時が来るのを待っていた。人育ち、まち育ての新しい手法がここにのぞいているかのように思えた。価値観の対立を乗り越えて持ち込んだ、池の管理も住民がやっている。子どもにとって危険だという従来の常識も、子どもの遊びに転嫁する。

ユーコート20周年を迎え、ここで育った若者が集まった。ユーコートでの子ども時代の経験を振り返りながら、自分たちが、どんな住まい、まちを目指すのか、しっかりとした方向感と方法論を心の中に焼き付かせていることに、大人たちは、耳を傾けながらおどろいていた。ここには、これからの都市環境、住まいの環境のありように関して意識の育て方のひとつの重要な視点が、含まれているのではないかと。住まい・まち、コミュニティを育むとき、子どもの視点から、市民の視点から進めるときに大事なものは、生活用語を語り合う対話ではないか。本音やつぶやきが自由に発せられ、異なった立場のもの同士の間で心ときめきあうような、緩やかなつながりが生まれる。

学校教育のような制度的なカリキュラムではなく、楽しみながらまちに関わりつつ、意識が変容し、日常生活、住環境を使い、関わり、時には煩わし



い掃除やメンテナンスに関わりながら、自ずと住まいやまち、環境に対する意識が内から育まれていく、隠された非文のカリキュラムというものが子どもや地域住民の日常生活の中に存在するとき、その地域、まちは、知らず知らずのうちに、自分たちのまちを育てていこうという気持ちが高まっていくのである。

子ども・市民との対話できるまちづくりの担い手 - 自覚的認識5ステップ

1. 「モノ・カネ・セイド」(13,12)からはじめない
「ヒト・クラシ・イノチ」ありき(1~4)からはじめる
2. 楽しい活動を重ねるプロセスを育む(5,14)
3. トラブルをエネルギーに変える自由応答を大切に(6,7)

(形式的民主主義より実感的民主主義を)

4. 責任あるまちづくり人を育む(8,9)
5. ソフトとハードの相互作用のかたちを、カネ・セイドを駆使しつつ創造する(10,13,11,12)

【話題提供 浦安市におけるまちづくりの教科書づくり
横堀 肇氏】



横堀肇先生からは、日本都市計画学会石川奨励賞を受賞された「浦安市におけるまちづくりの教科書づくり」について、話題提供いただいた。概要は以下のとおりである。(浦安のまち)

浦安市は東京に近いコンパクトなまちであり、外国人割合も高く、都市計画の専門家が多く住んでいる。江戸時代には塩を運ぶ水運の拠点であったが、やがて鉄道が整備され変わっていった。かつては、漁村集落が中心であったが、昭和30年代に漁業権を放棄し、埋立てが進んでいった。埋め立てによって4倍に広がった市域には、ディズニーランドや鉄鋼団地もあるが、海辺にニュータウンなども整備され、かつての漁村に住んでいた人たちの多くもそこで暮らしている。浦安駅と新浦安駅の間の2.5kmを新市街地と旧市街地を見ながら30分程度で歩くことができるコンパクトなまちである。

(背景と目的)

この始まりは、JICAの都市計画コースの講義の一環で行った「浦安のまち歩き」である。その後、浦安市在住の都市計画の専門家が自主的に集まり、「街人の会」なる勉強会を開始した。勉強会や町歩きを継続して行ううちに、何か具体的に残せることをやろうと声が上がリ、まちの見方やまちづくりの考え方を分かり易く伝える教材として「まちづくり・ブック浦安」を制作することになった。子

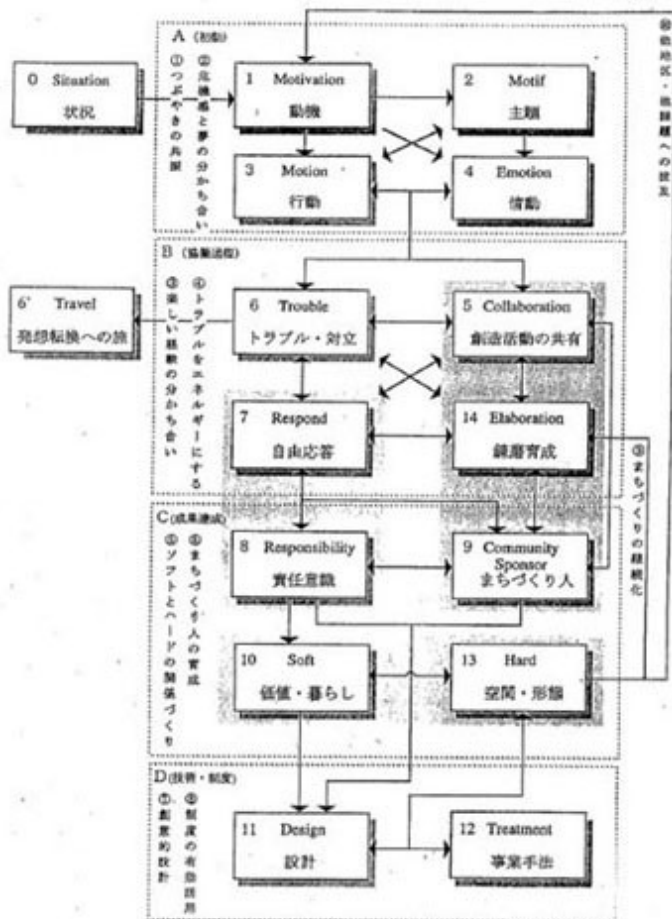


図 創造的まちづくりの方法枠組

講演資料P.11より

第2部 ひろしままちづくりフォーラム2007

「参加のまちづくり10年」

「可部のまちづくり」

加納 昭男(可部カラスの会)

「可部のカラスは腹まで黒い」などと昔の可部の商人に対する悪口にカラスが例えられてイメージが悪いが、カラスは賢くグループ行動もする。そこで悪いイメージを逆手にとって、可部のまちを良くしていこうと「可部カラスの会」と命名された。

活動のきっかけは平成8年に広島市が行った「区の特性を生かしたまちづくり事業」が実施されたことで、この事業を契機に「みんなでつくろう可部のまち」をテーマに毎回120~130名の参加者を得て「まちの歴史の学習」、「まちの問題点や魅力を見つけるまち探検」、「探検結果をまとめたマップやまちづくり提案の作成」等のワークショップを行い、延藤氏自身もこれらの活動に関わってきた。

平成15年にはその活動が評価され、まちづくり月間国土交通大臣表彰を受賞した。

延藤氏がこの活動の特筆すべきこととして以下の点をあげた。

- ・お宝と困った君を捜せ。
- ・知れば町が好きになる。
- ・ワークショップで夢を作る。
- ・可部には裏路と表路がある。
- ・根の谷川を中とした端々。

会則がなく、楽しく遊ぶ。そして連絡はすべてメールで行うことがこの会の良い所であり、最後に、

- ・初心忘れべからず。
- ・危機感が夢の共有化。
- ・懐かしい感情は住民の心をつかむ。
- ・思いや体験を表現してみよう。
- ・相互敬愛のこころを育む。

の5つのアドバイスとも言える総評で締めくくった。



「横川のまちづくり」

松木 朝海(横川商店街振興組合理事長)

平成14年に横川駅前広場の整備が始まったことを契機に、まちづくりが始まった。その中で明治38年に日本最初の乗合バスが横川駅~可部間を運行したバスの写真がき

どもをはじめ、大学生や市民など読み手・使い手も参加する教材づくりをめざした。

(本出版までの経緯)

制作過程において、中学教諭の試読を行い、中学での教材としての試用を決定し、その後、女子短大生や大学不動産学部の学生に対しても試用・試読を重ね、教育現場の声を反映させながら、中学生にも分かり易い、まちづくりの入門書となるような「まち本」を発刊することが出来た。

(まち本の目的と意義)

将来まちづくりを担う市民へ

1. こどもは意外と「まち」のことを知らない。
2. 最近、市民参加(都市マス、事業など)の時代。
「なぜ」への回答。ルールの意味。理想と現実。
3. まちは面白い。まちへの関心は、地域密着の子供から。
4. 目的は「一般市民」向けだが、大学生の入門書にも。
5. 中学生の感性や視点でのチェックが有効 副読本にも。

「専門市民」の活用

1. 地元の市民であるまちづくり専門家による。
2. 実施の計画や事業に携わっている専門家市民。
3. コンサル、ディベロッパー、市役所、大学、中学の先生。

(「まち本」発刊後の専門家市民と生徒の活動)

埋立地に出来たコンパクトなまち浦安は、地形が平坦で自転車がいやすい反面、駅前には自転車があふれ立体駐輪場も整備されているが間に合わず、自転車公害が問題となり、公共広場のあり方が問われている。

そこで浦安まち学習サーカス団が主催し、よみがえれ!新浦安駅前「公共広場」大作戦を繰り広げ、駅前放置自転車問題の解決に向けて、現地、話し合い、展示などの活動が続けられている。

(文責:長谷山 弘志)



かけに「レトロバス復元の会」が発足された。

当初は模型を作成するにとどまっていたが実際に動くバスを復元することになり、募金を募り、広島市立大学の協力を得て完成にこぎ着けた。

レトロバスの復元に伴い、子ども音楽劇の公演、テーマソングづくりが行われ、バスは「かよこバス」と命名された。

平成16年3月28日にバスの復元を記念して横川～可部を行進するイベント「川辺の大行進」が開催された。

かよこバスはエンジンを積み、自走能力がありながら車検などの問題で公道を走る許可が得られず、このイベントでは牽引されるにとどまったことは残念なことであった。

その後、横川より後に運行されたにもかかわらず日本で最初に乗合バスが運行として、その最初の運行日がバスの日に制定されている京都に出向き、バスの日を譲ってくださいとキャンペーンを行ったほか、B級観光地宣言、ふしぎ市など数々のイベントを行ってきた。

延藤氏がこの活動の特筆すべきこととして以下の点をあげた。

- ・思い出の未来化を図る。
- ・ユーモアとおもしろい広報活動(カワニバル、B級観光地)
- ・子ども自ら参加してオリジナルな表現アートを生み出す。
- ・よその若い層を巻き込む(学生自身が参画)。
- ・楽しいまちづくりがビジネスにつながる。

残念なことに平成18年度は資金不足のため、イベントの開催は行われなかったが、来年度再び、イベントが開催されることを願ってやまない。



「コイン通りのまちづくり」

川野 猛(コイン通り街づくり委員会)

平成10年2月に街づくり委員会が発足し、平成19年2月には定例会が109回を数え、多数の定例会を行っている。

通り沿いにある造幣局と関連して、造幣局花の回り道をはじめ、土曜夜市等のイベントの開催を行っている。

また、花クラブ、デザインクラブ、春の小川復活大作戦クラブなど各クラブが組織され、商店街関連者、周辺住民のみならず、五日市中学校、広島工業大学などの生徒、学生も参加している。

そのほか、金持神社、金持稲荷大社、金持地藏、金持福朗(フクロウ)の石像が通り沿いに設置され、全日本金持学会なる組織の結成、金持酒の販売など、金に関わるアイデアづくりに余念がない。

平成15年にはその活動が評価され、まちづくり月間国土交通大臣表彰を受賞した。

延藤氏がこの活動の特筆すべきこととして以下の点をあげた。

- ・地域のインフラを商店街に位置づける。
- ・人間の欲望を健やかに刺激するブランディング。
- ・参加者の組み合わせにジェンダバランス(女性参加)が良い。
- ・若者を巻き込み表現アートを組み入れる。
- ・命の早さを呼びさます。

造幣局のサクラの季節を迎え、今年も開かれるイベントが楽しみである。



「草津のまちづくり」

宮川 秋三(草津まちづくりの会代表)

平成10年4月に西国街道沿いに江戸時代(文政年間)から営業していた大石餅店の廃業・解体を契機に、まちの歴史や文化について後世に何を残し、受け継いでいくかを考えようと同年8月に「草津まちづくりの会」が発足した。

同年10月に大石餅おわかれイベントが開催されたのを皮切りに、草津まちづくり学校が開かれ、地元のお年寄りや会社員たちが草津のまちを歩き、町並み保存の改善点を出しあった。

その後、活動の拠点として地域住民の手作りにより、草津まちづくり交流広場が平成15年8月に設置された。

また、まちガイド倶楽部、御幸川生き生き倶楽部、IT博物館倶楽部など7つの倶楽部が組織され、各々の倶楽部がテーマに準じた活動を行っている。

平成10年から毎年1回、まち全体をミュージアムとみたてた「草津まちオープンミュージアム」を開催し、古典芸能鑑賞会、フリーマーケット、前述した倶楽部活動の成果を活かしたイベント等を行い、昨年第9回を迎え、320人以上の参加者でにぎわった。

平成16年にはその活動が評価され、広島市のひろしま街づくりデザイン賞を受賞した。

延藤氏がこの活動の特筆すべきこととして以下の点をあげた。

- ・危機感と夢の分かちあい。
- ・地域資源を豊かに生かす文化活動。
- ・子どもが参加すると父親が参加する。(父親が輝くコミュニティ)
- ・肩の力を抜いてぼちぼちやる。
- ・人材、財源確保。

特に活動の合い言葉でもある「肩の力を抜いてポツポツやるや」が活動を持続させる大きなポイントと思われた。



「佐東のまちづくり」

大田 健(NPO法人佐東地区まちづくり協議会理事)
昭和63年12月に「佐東地区の良好な生活環境の創造による住みよいまちづくりの推進を図る」ことを目的に会は発足し、平成17年7月にはNPO法人となった。

事業としてはイベント事業の一環としての地元小学生を対象とした図画コンクール、古川ホテルの里づくり事業、広報活動の一環とした記念誌の発行、講演会事業などを行ってきた。

平成12年からはタウンモビリティ事業に参画し、電動スクーターの体験会、ワークショップの開催を行った。

平成17年には緑井駅前サロンを開設し、タウンモビリティの活動拠点として電動スクーターの貸し出しのみならず、子どもから大人まで気軽に立ち寄り会話が弾むサロンとして活用が図られている。

また、企業、社会福祉協議会などから車いすや靴拭きマット等の寄付を受けている。

平成9年にはその活動が評価され、まちづくり月間建設大臣表彰(現国土交通省)、平成10年には広島市のひろしま街づくりデザイン賞を受賞した。

延藤氏がこの活動の特筆すべきこととして以下の点をあげた。

- ・集まれつながれすべてをネットワーク化。
- ・本物の小さな自然を生み出す(ホテル、カワニナ)。
- ・思い出を分けてください。
- ・資金計画のメリハリ。
- ・元気のいい方言の活用。



本日、発表を行ったまちづくりの会が抱える共通の課題として

- ・資金
- ・後継者の育成

の2点であった。この課題は全国どのまちづくり活動においても共通の課題であると思われる。

財政難、景気回復の遅れなどにより、自治体、企業から思うように補助が得られない、少子高齢化により、若年層の人口減少といった今、日本が抱える問題がそのまま、まちづくりに影響していることを実感した。

(文責：隅田 誠)

番外編(懇親会の風景)



副支部長のパフォーマンスに、福田先生も困惑気味?



福馬節炸裂。左手はいつものポーズです



間違いなく広島の“若手女性”プランナー・西元さん

中国・四国リレーシンポジウム

公共空間とまちづくり

第1回「水辺の景観・活用・治水」

日時：平成19年3月10日(土) 13:30～17:00

場所：松江市 くにびきメッセ

主催：日本都市計画学会中国四国支部

共催：日本建築学会中国支部、土木学会中国支部、島根大学、松江工業高等専門学校、米子工業高等専門学校、国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所、島根県、松江市、島根県建築士会、島根県建築設計事務所協会、島根県技術士会、鳥取県技術士会、島根県測量設計業協会、都市環境デザイン会議中国ブロック

協力：NPO法人まつえ・まちづくり塾

参加者：83名

今年度から2カ年で中四国の都市で開催するリレーシンポジウムの第1回を島根県松江市で開催した。松江市は古くから水の都として親しまれており、その景観や活用に加えて、昨年の水害に関連して治水といった観点から、2編の基調講演、調査報告、パネルディスカッションを通じて今後の水辺を活かしたまちづくりの議論を行った。

基調講演1「都市水害リスクからみた安全安心な地域づくり」 大西一嘉(神戸大学工学部)

第1編目の基調講演として、建築・都市安全計画がご専門の大西助教授にご講演をいただいた。以下にその概要を示す。

【講演】

- 水害時の情報提供について、防災行政無線の評価に関する高齢者・障害者アンケート結果からは、現在起こっている状況の認識には役だったが、実際に行動を起こすという点では役立たなかった。また、破堤の意味、避難勧告と避難指示の違いなど、専門的な用語が伝わらなかった。
- 30%の世帯に要援護者がおり、これら要援護者のいる世帯では、外水氾濫による急激な水位上昇に対応できない。また、要援護者の多くは、積極的な避難をあきらめており、床上浸水以上の被害でも避難しなかった高齢者・障害者は今後の災害でも避難に消極的である。
- 水害時の避難のきっかけは、近隣からの声かけが多く、近所付き合いが深いほど避難している。
- 防災への取り組みと意識の形成が必要であり、地域のリスクを知り、災害に対する地域社会における役割分担による対応が必要である。



大西一嘉氏

基調講演2「インターフェースとしての水辺空間～オランダの事例紹介～」 田口陽子(米子高専)

第2編目の基調講演として、建築デザインや都市の景観デザインがご専門の田口助手にご講演をいただいた。以下にその概要を示す。

【講演】

- オランダは干拓によってできた国土であり、自然環境と人工環境の区別がない。また、都市内に多くの運河を有し、多様な水辺空間が存在している。
- 水辺空間は スロープタイプ、建物直結タイプ、庭緩衝タイプ、街路緩衝タイプ、レベル差タイプ、水上タイプに分類でき、それぞれのタイプに異なった人々の振る舞いがあらわれていることを、具体的な事例紹介により示す。



田口陽子氏

「松江市の紹介」「水辺空間探偵団」「島根の水害」

川口洗葵(米子高専)

パネルディスカッションの前に、本シンポジウムの開催地である松江市の紹介が、米子高専専攻科の川口洗葵氏からなされた。また、松江市において米子高専が取り組んでいる水辺空間探偵団の活動として、多種多様な水辺空間の境界のあり方が、結果として人々の振る舞いに違いを与えていることに着目して整理した成果が発表された。

さらに、松江市における水害の事例として、「平成47年7月豪雨」と「平成18年7月豪雨」の紹介をされた上で、米子高専が実施した「平成18年7月豪雨」における被災住民の意識調査結果の発表があった。その内容としては、高齢化が進む中、情報提供のわかりにくさから避難をしなかった高齢者が多かったことなどがあげられた。

パネルディスカッション「水辺空間を考える」

パネリスト 神田裕幸(松江新旅情創造委員会委員長)

國井秀伸(島根大学 教授)

森口 保(地域研究家)

松波龍一(学会中国四国支部副支部長)

アドバイザー 大西一嘉(神戸大学工学部 助教授)

田口陽子(米子高等専門学校 助手)

コーディネーター

熊谷昌彦(米子高等専門学校 教授)

シンポジウムの締めくくりとして松江の水辺に係るパネリストによるパネルディスカッションを米子高等専門学校熊谷教授のコーディネートで実施した。

基調報告として、松江市新旅情創造委員会委員長神田裕幸氏からは、松江宍道湖温泉のホテル街が取り組む景観形

成と宍道湖の遊覧船の事例が紹介された。島根大学教授で汽水域研究センター長國井秀伸氏からは、水辺の生態系と景観（コンクリート護岸、砂浜など）との関連を示され、水辺の景観でそこに棲む生態系を大まかに把握できることなどが紹介された。松江市において地域研究家として活躍している森口保氏からは、松江市の水辺に残る歴史的な資源の紹介と、その景観形成に果たす役割について紹介があった。日本都市計画学会中国四国支部副支部長松波龍一氏からは、広島市において取り組んでいる水辺空間でのカフェなどの賑わい創出を紹介され、宍道湖・中海での展開の助言をいただいた。

会場の風景



高松伸設計の「くにびきメッセ」。会場は右手「円形」の1階



パネルディスカッションでは、これからの宍道湖・中海周辺での治水計画や景観形成に加え、教育の場としての活用の重要性について議論された。さらに、公共空間のうち、共の空間としての水辺活用の必要性が議論された。具体的には、水辺の茶店のアイデアが出され、今後具体的な取り組みが期待される。



フレッシュな受付(米子高専の学生の皆さん?)



多くの方々が参加。正面のカーテンを開けると大橋川の川面(左の写真)



【感想】

年度末の多忙な時期の開催であったが、多数の参加者があったシンポジウムであった。基調講演からパネルディスカッションまで、非常に幅広い専門分野からの報告や事例紹介があり、同じ水辺に関しても様々な視点から議論をすることができて、有意義な時間を過ごすことができた。

特に、災害時における要援護者の避難と情報提供の関係や水辺の生態系と水辺景観の関係など、新しい観点からの報告が多く、今後の水辺を考える上で非常に参考となる知識を頂けた。また、水辺を活かした賑わい創出に関しては、幅広い参加者から期待の声があがり、水辺の茶店の開店の実現が楽しみである。

最後に、本シンポジウムの準備から開催、後片付けに至るまで NPO 法人まつえ・まちづくり塾と米子高専の皆様非常ににお世話になった。ここに記して感謝の意を表す次第である。
(文責：森山 昌幸)



まつえ まちづくり塾のメンバーによるファシリテーション・グラフィック



次回に向けて：カラコロ広場(小泉八雲の後姿)

都市計画サロン

講師：脇田 祥尚(広島工業大学 環境学部 地域環境学科 助教授)

表題：脇田先生 さよなら講演！

「フィールドワーク型教育・研究の実践
～地域の様々な主体との連携を通じて～」

日時：平成19年3月27日(火) 19:00～21:15

場所：コンフォートホテル広島 会議室B

参加者：10名

【脇田祥尚氏 プロフィール】

広島工業大学 環境学部 地域環境学科 助教授

フィールドワークにもとづく地域生活空間計画に関する研究

東南アジアの都市居住に関する研究

市民まちづくりならびに市民参加の計画論

地域の生態系にもとづく計画技術に関する研究

カンボジアやフィリピン・インドネシアのフィールドワークを繰り返しながら地域の生態系にもとづく計画技術の開発を行うとともに、国内では市民参加のまちづくりをワークショップ等の手法を用いて実践しています。

広島工業大学の脇田祥尚先生が、大阪の近畿大学へ行かれることになった。

広島にとっては大きな痛手だが、ご栄転をお祝いすると共に、これまでの集大成として、ご講演をお願いした。

表題は、「フィールドワーク型教育・研究の実践 - 地域の様々な主体との連携を通じて」だ。

脇田先生は、京大の布野研に入ったところから、フィールドワーク式で、地域共生の生活空間計画の研究を始めた。

2002年に東南アジアで博士論文を書いた。

地域共生の生活空間計画とは、「地域」「風景」「自律」「協働」「斬新」「地域の文脈」「小さい建築」というキーワードで示すことが出来る。

広島にいた4年間の代表的な研究を発表していただいた。

カンボジアでのフィールドワーク

カンボジアでは、地元の大学と共に、ショップハウスというカンボジア独特の建築について調査をしている。

ショップハウスは、1階を店舗、2階以上を共同住宅としている建築物で、建て増しをしたりすることにより、それぞれの住み方が表れている。大学院生をコアとして、広



島工大の学生と、現地の学生でコンビを組み、それぞれの家にお邪魔して、どのような暮らし方をしているかということ进行调查することにより、住空間の類型化の研究をした。

また、小さい建築というどこにでもあるもので、地元の人が自力で出来る建築を目指すため、学部生を中心に、建築工法(泥を少しずつ積んで壁にする方法)を研究した。まずは、小屋レベルのものを作ってみて、実用性を確認し、その後、小学校を作成している。

また、平岡元市長を館長とし、石山修武が設計したカンボジアのひろしまハウスが建築されているが、その建築にも協力している。大阪に行っても、今後もひろしまハウスには係わって行きたいとのことだ。

宮島こもん

脇田先生が広島に赴任した際に、広島で何が出来るかと考えたときに、まずは、広島らしいフィールドを作りたいと考えた。そのときに思いついたのが、宮島だ。

宮島では、町屋通りで旅館を営む巖嶋生活文化研究所の菊川照将氏と知り合い、町歩きやシンポジウム、展示会などを開くことにより、より宮島のまちを知ってもらおうとする働きをし、新聞にも取り上げられるように働きかけ、2006年10月に、菊川氏の持っている町屋を拠点に、「宮島コモン」という組織を立ち上げた。

現在、その町屋の2階では、大学院生が常駐し、1階は色々なイベントのオフィスや展示の場として広島工業大学の地域拠点として使っている。

宮島での研究としては、五重塔の色々な場所からの見え方から町を考えてみたり、1842年天保13年刊行の芸州巖島図会(観光場所などを描いた江戸時代の観光案内図)から、当時の町と現在の町を比べてみるなどの研究を行っている。

意見交換

・小さな建築からまちが始まっているというのには共感する。誰でも作れる建築が集まって町や風土を作り出すということ考えると、宮島で福島俊をという建築家が町屋通りで1軒ずつ江戸時代からの町屋で昭和の時代に見る影もなく改装されているものを、現代風だけれど、江戸時代の文脈や雰囲気を出し出す建築にすることを続け、10年で5軒改装を完了し、また、ぎやらしい宮郷でギャラリーの



プロデューサーを続ける、それぞれの家の前に屋号を書いた江戸風の灯籠を皆で吊すなどといったソフト的なプロデューサーとしての役割を果たすことにより、町屋通りの雰囲気が変わってきているというのは、小さな建築が町を作った好例なのではないかと思う。町場、野丁場という言葉があるが、建築士をはじめ、手のいい職人をどんどん活用し、まちに活かしていった方がよい。

・学生がまちでフィールドワークをするというのは、数年間で卒業してしまう人がまちに係わるということだが、大丈夫なのだろうか？学生としては、研究の対象としてまちを見るということであり、論文が書ければそのまちから卒業してしまう。ただし、学生からしてみれば、フィールドで研究するという事は、何よりも実施に近く、身になる勉強ができる機会である。できれば、卒業した学生が、そのまちに戻り、まちの成長に係わってほしい。

・合意形成とは、何だろうか。行政からまとめてほしい(内容)意見を纏めるという事だろうか。誘導ではないまちの意識を形成できる市民主体のまちづくりが必要だ。

感想

流石、フィールドワークから入って研究をするという市民主体のまちづくりの話だけに、参加者全てが興味のある内容だったようで、発表が終わった後、1時間近くも話し込んでしまった。脇田先生におかれては、大阪に行ってもフィールドでまちづくりを研究していただき、時々は広島に戻ってきて色々話題を振りまいていただきたい。

(文責：福馬 晶子)

会員紹介

柏谷 増男(かしわだに ますお)

愛媛大学理工学研究科教授、防災情報研究センター長
研究室紹介

都市環境計画研究室に所属しています。研究室教員は、私と倉内慎也講師ですが、愛媛大学総合メディアセンターの二神 透講師や東京大学工学研究科の羽藤英二助教授が研究室での教育研究活動に参加して下さっています。

新しい都市交通調査手法の開発

以前に研究室におられた朝倉康夫先生(現在神戸大学教授)や羽藤先生らが始められた研究で、GPS 携帯電話を用いて人の交通行動を調査するプローブパーソン調査です。膨大なGPSデータの処理やウェブダイアリーデータとの照合作業など被験者ひとりあたりの調査作業量が大きく、被験者の負担も大きいので、被験者数を増やすことは容易ではありません。しかし、移動時刻や交通経路を正確に把握するなど、現時点では最も正確な交通調査法です。また、時系列データが得られることも特徴のひとつです。調査手法として確立するためには、まだ多くの課題が残されていますが、国土交通省との連携のもとに、今後も継続して行きます。

また、近年導入されているICカードデータの交通調査への利用についても、その研究にはプローブパーソン技術がかかせなく、研究室に蓄積された知識が活用できます。幸い地元の伊予鉄道が積極的にICカードを導入しているので、協力して研究を進めています。

防災情報研究センター

愛媛大学では、平成13年の芸予地震、平成16年の台風災害に遭遇した経験を踏まえ、平成18年に防災情報研究センターを発足させました。都市計画に関係した研究では、避難支援や救急車交通に関する研究を行っており、とりわけ「災害時要支援者避難計画」については、新居浜市防災安全課と協力して実践的なフィールドワークを展開しています。この計画では、高齢者や障害者など自力での避難が困難な方のリストを作成し、おひとりずつに、災害時に支援していただく方を登録します。高齢者や障害者の方々がリスト掲載を断られるとか、支援者が見つからないとかの事情があり、計画策定は容易ではありません。私たちはモデル地区を定めて、ワークショップを何回も開催し、地域の人々の相互理解と災害への認識を深めながら、災害時に実効性のある避難計画を作ろうとしています。研究というにはあまりにも現場作業的かも知れませんが、貴重な知見が得られるとともに、多くの解決すべき課題が見つかります。



会員紹介

松田 智仁(まつだ ともひと)

広島市環境局環境政策課ゼロエミッション推進担当

学会支部では、企画・研究委員会所属の松田です、昨年度まで副委員長の立場からお願い事も多く、研究会やシンポジウムなどの事業に多くの方々にご協力いただきました。あらためてお礼申し上げます。

1956年広島市八丁堀の生まれ、50歳で、現在広島市役所勤務です。中学校の頃、ニュータウンを設計、タウンハウスなどを建設し、住まい方のルールを定めて・・・と夢見て、建築と都市計画を勉強してきました。公務員ですから異動は避けられませんが、どんな部署に就いてもライフワークは街づくり研究で、都市計画学会の他、日本建築学会中国支部都市計画委員会、広島県建築士会広島支部まちづくり委員会に所属し、若い頃、土地区画整理士、一級建築士、建築基準適合判定資格者、技術士(建設部門：都市及び地方計画)を取得いたしました。最近取得したライセンス??は「ひろしま通」です。一安心。

半世紀の人生を振り返ってみますと、公務員としての異動には比較的、そして先輩や友人にもですが、恵まれていました。70年代後半に当時としてはまだ珍しかった子ども自然体験教室の学生ボランティア活動を実践しつつ、大学での専攻の都市計画の実務をめざして、80年に日本一大きな町、五日市町役場の職員となり、都市計画課配属のままで広島市に合併、通算9年間の都市計画課から89年郵政省に出向し「電気通信基盤充実臨時措置法」予算化・立法化に関わり、91年市役所に戻って企画課9年間、都市デザイン室と都市政策担当で5年間です、この間、五日市町市街地整備基本計画策定、五日市町都市ビジョン策定、線引き・用途地域変更、都市計画情報システム導入、地区計画制度の活用や広島市総合計画の策定、区の魅力づくり事業の創設、まちづくりボランティア支援体制の整備、風景づくりマスタープランやひろしま都心ビジョンの策定と、各業務では現場と市民参加などに配慮しつつ仕事をしてきました・・・つもりです。05年度は臨海開発課において、クルーズ客船誘致、みなとの賑わいづくりなどを推進。06年から初めての環境局で将来世代により良い環境を継承していくために、ごみを可能な限りゼロに近づけるごみ減量プログラムに取り組んでいます。

現在の業務の話しを少しさせていただきますと、広島市では、60年代からの高度経済成長期に、「消費は美德」といった風潮の中で、ごみの発生量が急激に増加したため、75年に

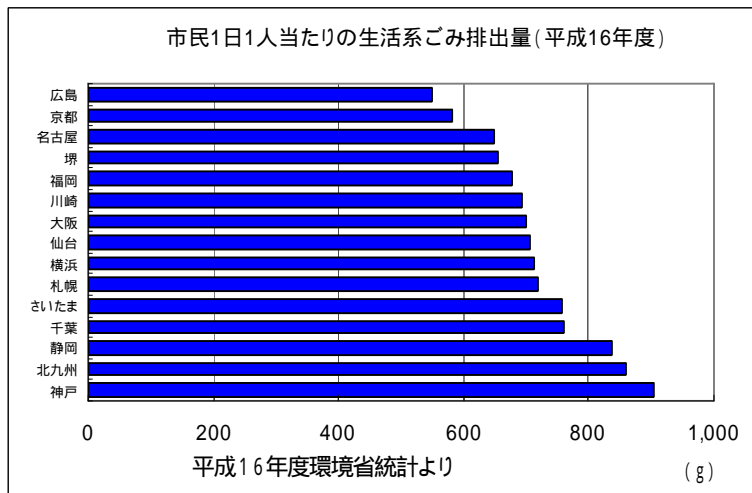
「ごみ非常事態宣言」を発しました。翌76年から全国に先駆けて家庭ごみの5種類分別収集を実施し、市民の協力のもとにごみの減量・リサイクルを進めました。さらに、2004年からのリサイクルプラ分別などの8種分別へもスムーズに移行しました。こうした結果、ごみの分別は今や当然のこととして市民に定着し、市民一人当りの家庭ごみ排出量は、政令指定都市の中でも最も少ない数値になっています。つまり、市民のごみに対する意識の高さは大都市では一番となっています。

今後、より一層のごみ減量・リサイクルを推進するためには、市民の生活様式を見直し、ごみの発生を抑制し、一度排出されたごみは資源として今以上に有効に活用することが重要です。忘れかけていた日本独自の生活文化である「もったいない」精神を、市民の「衣・食・住」の生活のあらゆる場面において思い起こし、生活様式を変えていくことが必要となります。経済活動では、ものの作り方、運び方、売り方の見直し、またバイオ系へとエネルギー資源の転換も必要です。どの地でも自らの問題、地球の問題として引き続きご協力ください。

一方、アフター5では、91年から都市政策の研究会、建築学会、草津まちづくりの会などにおいて「まちづくり」と「自己実現」に努めてきました。現在も仕事でない休日には、街づくり活動、活動の課題整理などに加え、新たにアニメーションによるまちおこしなどにおいて楽しみながら市民参加のまちづくりを実践・勉強中です。おかげさまで草津まちづくりの会の活動は、2006年にまちづくり月間国土交通大臣表彰を頂戴いたしました。引き続き、参加のまちづくり推進方策を探っていきますので、今後ともよろしくお願ひいたします。



2006.11.23 草津まちづくりの会 御幸川御幸山源流探検



2006.8.20

ハビークラブ 街じゅうアニメーションで賞状章紙

ホットコーナー

中国・四国地方にもICカード時代が到来か！

編集委員 高田 禮榮

最近、新聞紙上でICカードに関する記事を目にする機会が増えました。コンビニのレジでは、“チャリン”という音とともに、電子マネーで精算が済まされています。

前号のニュースレター“「LRTとまちづくり」に関する見学会”の記事でも伊予鉄道(松山市)のICい~カードの事例が紹介されていましたが、中国・四国地方においても、交通系を中心としてICカードが私たちの生活の中に登場し、普及しつつあります。

今さらではありますが・・・ICカードとは

ICカードとは、情報の記録や演算を行うICチップ(集積回路)を組み込んだもので、情報をやり取りする際、読取機にカードを差し込む“接触型”と、読取機にカードをかざして、電波で情報のやり取りを行う“非接触型”に大別されます。接触型は表面に金属製の端子が見えるもので、クレジットカードや銀行のキャッシュカード、ETCカード等で導入されています。非接触型はコイル状のアンテナが内部に組み込まれており、表面上、ICチップは見えません。非接触型は、パスケースに入れたまま、かざすだけで決済ができるなどの特性から交通系を中心に普及しており、代表的なものではJR東日本のSuicaなどがあり、JR西日本でもICOCAが導入されています。また、コンビニなどではE-dy対応の読取機が導入され、電子マネーとして利用が普及しつつあります。

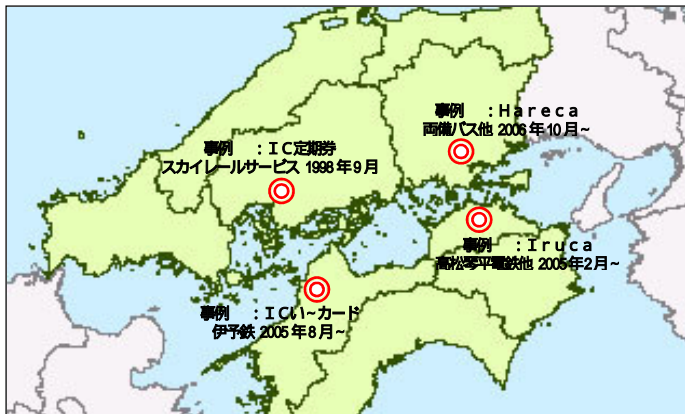
ICカードの大きな特徴としては、セキュリティレベルが極めて高く、偽造され難いこと、情報容量が大きいこと、高速で決算すること、また、カード購入時に登録すれば再発行も可能であることなどがあげられます。



私自身が実際に持っているICカードです。関東・関西方面への出張時などで利用しています。JR利用の際には切符購入時に並ぶ必要も無く、小銭いらずで便利です。

中国・四国地方での動向は・・・

交通系ICカードとしては、1997年に静岡県豊田町の町営バスに「豊田町ユーバスカード」が初めて導入され、それ以降、全国へと急速に普及しつつありますが、ここ中国・四国地方でも図に示すとおりの導入事例があり、今後、更なる進展が予定されています。



[事例 : IC定期券 スカイレールサービス]

JR山陽本線瀬野駅と住宅団地「スカイレールタウンみどり坂」を結ぶ短距離交通システム“スカイレール”において、1998年、全国に先駆けて非接触ICカードの定期券が導入されました。住宅団地の住民が利用対象の基本となるため、カードホルダーは250人程度(H18.4時点 国交省鉄道局調べ)と極めて少ない状況ではあります。

[事例 : Iruca(ルカ) 高松琴平電鉄他]

ことでんグループの電車とバスで利用できるICカードとして2005年2月に導入されたもので、現在は、乗車運賃精算だけでなく、駅周辺8カ所の駐車場でIrucaによる精算ができ、パーク&ライドを可能としています。また、2006年11月からは、高松市内のアーケード街にて電子マネーサービスの実証実験もスタートさせ、公共交通と商店街での料金精算のシームレス化により、中心市街地の活性化に繋がるかどうか検証が進められているところです。

[事例 : ICい~カード 伊予鉄]

伊予鉄の電車・バス・タクシーで利用できるICカードとして2005年8月に導入されたもので、全国初のおサイフ携帯対応(モバイルい~カード)としても注目されました。また、い~カード機能を持つJALマイレージバンクカードや、いよてつ高島屋のローズカードも発行され、今年2月には、愛媛FCファンクラブカードも加わりました。現在は、松山市内10店舗のコンビニや自動販売機でも利用でき、電子マネーとしての利用も普及しつつあります。



バス乗降時にカードをかざして精算します

[事例 : Hareca(ルカ) 両備バス他]

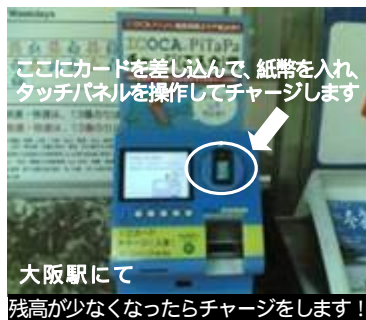
両備バス、岡山電気軌道、下津井電鉄の3社の電車、バスで利用できるICカードとして、昨年の10月に導入されたもので、広域連携も視野に入れ、関西圏の私鉄を中心に広く導入されているICカード・PiTaPaも利用できる環境となっています。(ただし、Harecaは関西圏では使えません。)

前述のとおり、中国・四国地方では、4件の交通系ICカードの導入実績がありますが、今後もJR西日本によるICOCA対応改札の整備や、広島都市圏を中心とした新たなICカードの導入準備が進められており、中国・四国地方でも、交通乗車券としてのICカード化が加速しつつあります。

[予定 : ICOCA(仮) JR西日本]

JR西日本では、近畿圏において2003年11月からICOCAを導入し、今年の夏を目途に広島・岡山エリアの135駅でICOCA対応の改札を順次導入する予定となっています。4月14日には広島駅北口に第1号機がお目見えするようです。(2007/3/27

中国新聞記事情報)ICOCAは、2004年8月からJR東日本のSuica、2006年1月からは、関西圏を中心に普及しているPiTaPaと相互利用が可能となっており、広域で使えるICカードとして中国地方でも今後、多いに普及することが予想されます。また、今までのICOCAによる運賃精算以外の利用としては、駅構内の売店やコンビニなどの一部に限られていましたが、今年3月15日からは駅外部では初となるショッピングセンター(京都駅地下街)での利用も可能となり、交通乗車券から電子マネーとしての利用拡大が図られています。



今年3月15日からは駅外部では初となるショッピングセンター(京都駅地下街)での利用も可能となり、交通乗車券から電子マネーとしての利用拡大が図られています。

[予定 : 広島都市圏ICカード(仮称) 広島電鉄他]

広島電鉄や鞆鉄道(福山市)などの広島県内でバスや路面電車、旅客船を運行する16社・局において、広島都市圏を中心としたICカードの導入準備が進められています。



導入は2008年1月から順次進められる予定で、2009年度末までに広島市と松江市・浜田市の両市を結ぶ高速路線バスや、宮島フェリー、四国と広島を結ぶ高速船なども対象に加えられるとのことで、ICOCAも利用できる環境となるようです。(2007/2/9日経新聞記事情報)広島都市圏ICカード(仮称)の導入に向けては、広島県も2007年度予算案として1億6,300万円を計上しており、本格導入に向けて官民一体となった取り組みとして着々と準備が進められています。

【雑談メモ】：恐るべし! Suicaの爆発的な普及... Suicaは、2001年11月の発行以来、わずか3年足らずで1000万枚を突破し、今や2000万枚に達する勢いです。日本一といわれるJCBカードの発行枚数が40年かかってやっと5000万枚、三井住友カードは30数年で、1300万枚(単体)だそうで、Suicaの驚異的な普及状況にはびっくりです。鉄道事業者のJR東日本は、今やSuicaによる電子マネー事業が経営の中核に据える(中期経営計画)までになっています。

出張の折、新宿駅を散策してみました!

東京出張の際に、Suicaを持って新宿駅を散策してみました。色んなところで使えるものがありました。なんと、駅にある巨大なポスターにSuicaをかざすと、掲載されている商品などの詳細情報やキャンペーン応募情報、クーポン等が携帯電話(事前登録)に配信されてくる“SuipO(スイポ)”(右下写真)という新しいサービス(2006年7月31日~スタート)もありました。駅構内のSuicaによるキャッシュレス環境には驚きです。



共通化・相互利用により便利に使いたいです!

言わずもがなですが、地方部では概して、モータリゼーションの進展とクルマ中心社会への変化によって、大型駐車場が整備された郊外型店舗へと人の流れは拡散し、中心市街地の空洞化と公共交通利用者の減少を招くなどの問題を抱えています。交通系を基盤としたICカードの導入は、利便性とサービスの向上による公共交通利用者の増加と、店舗等への利用拡大による料金精算のシームレス化などをきっかけとして、街中へと人を誘引する一つのツールとなることを期待したいところです。

また、ICカードには色々な情報の蓄積が可能ですので、利用履歴やID情報を活用することによって、交通分野のみならず、教育・医療・福祉など、生活に密着する様々な場面での活用も考えられます。最近、大学生協では、ミールカードと呼ばれるICカード(接触型・プリペイド式)を導入し、食堂での利用履歴と栄養価を掲載したレポートを、毎月、自宅や親元に届けるサービスを行っており、食事の改善提案なども可能なものとなっているそうです。行政サービス分野においても、住民基本台帳カード(総務省)やIC旅券(外務省)、運転免許証(警察庁)などがあります。今後、ICカード化の更なる加速が予想されますが、私たちが便利に利用できるよう、共通化や相互利用によるシームレスな利用環境が整うことを願っています。財布の中が、キャッシュカードやクレジットカード、ICカードと沢山のカードで膨れあがらないように... (文責: 高田 禮榮)

今後の活動計画

(1) 2007年度・第5回通常総会・研究発表会

日時：2007年5月19日(土) 10:00～17:20

会場：ホテル法華クラブ広島10階会議室

プログラム

研究発表会・特別講演会 10:00～12:00
 招待論文：熊谷昌彦氏(米子高専)
 招待論文：山中英生氏(徳島大学)
 第1回幹事会・地域連携行事実行委員会(2階会議室)
 12:00～13:30
 総会 13:50～14:20
 研究発表会
 セッション1 14:30～15:50
 司会：藤原章正(広島大学)、桑野将司(広島大学)

中四国地域における工業都市の土地利用規制に関する研究：石村壽浩(山口大学)
 防災に関するソフト的施策を評価するための津波避難シミュレーションモデルの開発：渡辺公次郎(徳島大学)
 視覚障害者のための音声案内システム整備に関する基本的調査研究 鳥取県境港市水木しげるロードの事例：福井美弥(米子高専)
 米子市旧加茂川・寺町周辺地区における官・民・学協働による案内施設の計画に関する研究：川口洸葵(米子高専)

セッション2 16:00～17:20

司会：山岡俊一(呉高専)、岩永秀樹(オオハ)
 広島モビリティマネジメントの効果の分析：藤原章正(広島大学)
 日吉津村における住民の治安意識に関する研究：藤原研哉(米子高専)
 若者の中心商店街に対する満足度と地域愛着心 - 高松と松山の比較調査から - : 高塚創(香川大学)
 市民・子どもに対するまちづくり教育支援の現状と課題：篠部裕(呉高専)

懇親会(1Fレストラン：会費5,000円) 17:40～19:30
 第5回通常総会資料等は、5月の初旬に事務局からお送りします。

(2) 支部連携行事 中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり”の開催

平成18年度・19年度において、本部より支部活動の活性化や社会連携の推進に関わる取組(支部連携行事)に対する助成があり、中国四国支部では“公共空間とまちづくり”を共通のテーマとして、5都市(松江市、岡山市、徳島市、高知市、広島市...総括)でリレーシンポジウムを開催します。このうち松江市については、本号で報告しているように、3月10日(土)に開催しました。

岡山市(第2回リレーシンポジウム)

テーマ：公共空間と歴史遺産を生かした岡山市のまちづくり(仮題)

開催予定：2007年6月頃

概要(予定)

基調講演(講師1名)
 パネル討論
 まちづくり懇談会(行政、大学、建築士会、NPO法人、市民団体など)

徳島市(第3回リレーシンポジウム)

テーマ：水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり

開催予定：2007年7月21日(土)

概要(予定)

見学会(県外からの出席者)
 時間 13:40 - 14:00
 場所 ひょうたん島一周クルーズと川から見た都市景観の視察

備考 乗船代金(保険代)100円が必要。

シンポジウム

時間 14:40 - 17:30

場所 ホテルサンシャイン徳島

参加費 無料

内容

1. 開会
2. 日本都市計画学会中国四国支部支部長挨拶
3. セッション1
 「魅力的なまちづくりと元気な市民活動 - 新町川を守る会のボランティア活動 - 」
 講演(講師：NPO法人新町川を守る会理事 長中村英雄氏)
 コメント(コメンテーター)
 質疑応答
4. セッション2
 「水辺空間の景観整備に向けて - ひょうたん島・景観まちづくり事業 - 」
 講演(講師：徳島県建築士会)
 コメント(コメンテーター)
 質疑応答
5. セッション3
 「個性あふれる景観とまちづくりの推進 - 景観法に基づく景観計画の推進について - 」
 情報提供(講師：国土交通省四国地方整備局)
 質疑応答
6. セッション4
 「四国の都市景観評価事例(案)」
 話題提供(講師：(有)エム・オー環境設計代表取締役大西泰宏氏)
7. 閉会

懇親会

高知市(第4回リレーシンポジウム)

テーマ：高知の「日曜市」(予定) -

開催予定：2007年9月頃

担当責任者：大谷英人氏(高知工科大学)

概要(予定)

検討中

広島市(総括(第5回)シンポジウム)

テーマ：中国・四国の現場に学ぶ公共空間とまちづくり

開催予定：2007年11月頃

担当責任者：松波龍一氏(松波計画事務所)

概要(予定)

4都市におけるシンポジウムの報告

広島市における事例報告

総括パネルディスカッション「公共空間からのまちづくり」

まとめ

交流会(スタンドカフェ形式、参加者スピーチ、参加費無料)

街づくり相談コーナー

日時・会場：シンポジウム(広島市...)会場と同一会場(別室または同室)にて10:00~12:30 開設予定

支部ホームページでの相談受付も行き、現地確認ができる場合はレポート回答を試みる。

担当責任者：松田智仁氏(広島市)

対象の対象：概ね5年以上、街づくり活動に取り組んでいる市民団体、中国四国9県内の活動団体

ねらい：市民活動支援(具体的まちづくり活動への学会等の貢献)、他の機関との連携(街づくり相談コーナー開設のプロセス、実施を通じて他の団体との連携)、街づくり相談結果等の情報発信・提言(結果を公表することにより、地域情報の発信やまちづくり促進の提言とする)

編集後記

街路樹の新緑が春を告げ、日中は額に汗する陽気となりました。慌しい年度末を越え、いつもと変わらない新年度の幕開けですが、不思議と心地よい時間が過ぎている気がします。さてニュースレター第14号が、会員皆様のご協力のもと完成しました。今回はシンポジウムや講演会、フォーラムなど盛りだくさんの内容をお届けしています。このうち支部連携行事の「中国・四国リレーシンポジウム」は、3月に松江市を皮切りにスタートし、公共空間とまちづくりを共通テーマとして、岡山、徳島、高知、広島と中国四国地方を横断していきます。会員の皆様もお近くの会場へ参加していただければと思います。

新年度もこのニュースレターを会員の皆様とのコミュニケーションツールとして活用していただければと思います。(周藤 浩司)

編集委員：周藤浩司(編集長)、佐伯達郎、佐藤俊雄、隅田誠、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也



春うらら、基町環境護岸